

This variety differs from typical *Scilla scilloides*, in having the twice larger leaves and inflorescence.

愛媛県北宇和郡日振島にツルボの葉・長さ・花序等すべて約2倍の大きなツルボを採集し、その後松山農科大学構内で栽培しているが、年々同様な形態を持ち続け旺盛に繁殖している。産地などよりしてツルボの倍数体かもしれないと思われる。尚この島にはハマユウ・キジヨラン・カクツツガユ・ケオホツヅラフデ・ハマビワ・マルバツユクサ・サカキカズラ・ナンバンキブシ等も生育している。(松山農科大学)

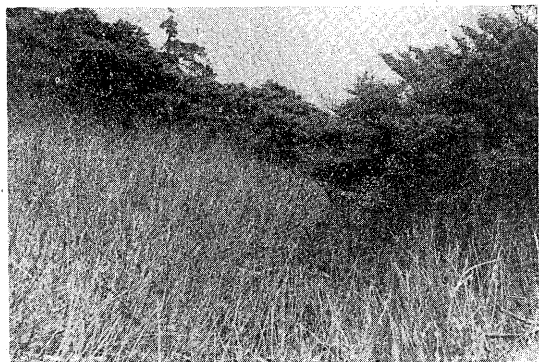
○ノネズミと笹の開花 (小清水卓二) Takuji KOSHIMIZU: The relation between *Sasa* and the field mouse.

かつて中井猛之進博士が、「天城笹の開花結実に伴ふ野鼠の害」と題して(植研誌 12, n. 12, 1936), 天城笹 *Sasa amagiensis* Makino が 1934~1935 年に一斉に開花結実して枯死し、その結果、その地に野鼠の一種モグラネズミが著しく増殖した事を報告された。

これと全く同様な現象が 1951~1953 年にかけて三重県三重郡御在所岳 (1209M) 一帯に起つた。御在所岳は鈴鹿山系の代表的な山で、この山の 800 M 附近から頂上にかけて何百町歩かが一帯のツボイザサ *Sasa Tsuboiana* Makino の大群落である。このササが 1950 年頃から開花結実を始め、特に 1951~1952 年にかけて著しい開花結実が起り、小麦粒大のササの種子が鈴成りとなり、これが多数地上に落ちたため、このササ原に野ネズミが急に増殖して、見る見る中にササの地下茎の横走する表土 20~25 cm の深さの所をネズミの通路の孔だらけとし、遂にササは地下茎と共に浮き上つた状態となり、土中の水分や養分関係を全く断たれて完全に全滅枯死して、今までの縁のツボイザサの大群落は、浮島のような浮床の上に白色の枯稈が林立して、多枯の草原の感を呈するに至つた。

再生力の強いこのササの地下茎も殆んど完全に枯れはてて、地下茎の節から新芽を出しているものは全く九牛の一毛にも及ばない。

短期間に大自然の植生をかくも完全に变化させたものだと思ひを感じた。今後この全滅したササの群落地帯の植生がどのように変化して行くか、またツボイザサの復活が如何なる工合に進むか極めて興味ある問題である。



御在所岳のツボイザサ *Sasa Tsuboiana* Makino の枯稈の林立する状態 昭和28年7月24日撮影。

(奈良女子大学)